

昨年のカンヌ映画祭で審査員賞を受賞し、興行収入 32 億円の大ヒットとなった「そして父になる」が、第 37 回日本アカデミー賞優秀賞発表にともない再び話題だ。すでに大御所 スティーブン・スピルバーグらによるハリウッドリメイクも決定した同作品の内容は、6 歳の息子を持つ幸せな日々を過ごす夫婦が、ある日子供を出産した病院から呼び出され、実は彼らの息子の出生時に“子供の取り違え”が起きたため、彼らの息子は実の子ではないという衝撃的な事実を突きつけられ、取り違えられたもう一組の家族との交流や葛藤を描いた「擬似家族もの」となっている。

そう言えばかつて最高視聴率を誇った「家政婦のミタ」や大ヒットした「マルモのおきて」、変り種の「妖怪人間ベム」など擬似家族ドラマ花盛りの観がある。今現在も、ドラマ「明日、ママがいない」の中で、新しい里親候補のもとへ“お試し”に行く子供たちが描かれ物議を醸し出したが、私にはこれも「擬似家族もの」の延長に見える。なぜ人々は家族のことになるとこうもムキになるのか。言うまでもなく人間にとって一番大事な絆のことだからである。揺さぶられるのである。看過できないのである。特に我々日本人は先の震災においてもそのことを思い知らされた。

聖書においても家族のことは最重要課題であるが、やはり擬似家族が大勢出てくる。そもそもキリスト自体が神であるのに人と暮らしたし、彼の父であるはずのヨセフは“義父”であった。また、彼の弟子パウロはその弟子テモテに向かって「子」と呼んでいるなど枚挙に暇がない。しかし何と言っても極めつけは「教会」である。実は教会では人々はお互いに「兄弟、姉妹」と呼び合う。それは

**「神の御霊に導かれている人は、誰でも神の子である。私たちはその御霊によって、神を『天のお父様』と呼ぶことが出来るようになった。」**

**ローマ人への手紙 8 章 14-15 節:現代訳、**

とあるように、救い主キリストを信じ、聖霊を受けた者は皆、神の家族だからである。だから祈る時はいつも「天の父よ」と祈り始める。そう。「神はあなたの父になる」のである。神が

父である家族の一員となって、神の愛に揺さぶられる感動を経験しよう。

2014-1-29

